

Practices and Challenges of the Graduate School of Letters for an English Training Session

Sakurai Yoshihide*

Graduate School of Letters, Hokkaido University

文学研究科英語 FD の実践と課題

櫻井 義秀 **

北海道大学大学院文学研究科

Abstract — This paper reports the results of an English training seminar for a year in the Graduate School of Letters, which was implemented as a part of the faculty development program by the International Assistance Office of Hokkaido University. The author, one of the participants, discusses its multiple effects on undergraduate and graduate course education. Illustrating the condition in which our faculty deals with foreign students, whose number is expected to be more than 20% in the master course and 30% in the doctoral course, I will suggest how to resolve the challenges created by the rapid move towards internationalization, which separates into several dimensions.

(Revised on 6 August, 2010)

1. 経過報告

2010年度に実施された文学研究科英語FDは、佐羽内喜久子コーディネーター（学術国際部国際企画課国際教育連携支援チーム）の下6名の教員参加により計6回実施された。

授業は全て英語で行われ、構成は次のようなものである。

- ① オリエンテーション
- ② デモレクソン（多様な英語力を持つ留学生・

日本人学生向けに、自分の専門を生かした内容で講義を5分ないしは10分間行い、参加者がテーマについてディスカッションを行う）

- ③ デモレクソンのビデオを見ながら、建設的なフィードバック（言語・発音の明晰性、AVの使用効果、指導態度、授業の構造、準備状況、学生の巻き込み等について）を行う。
- ④ コーディネーター、外部講師からのコメント。
- ⑤（授業外）ライデン大学での研修参加（中村・中戸川・蔵田・眞嶋4名の参加）

*) Correspondence: Graduate School of Letters, Hokkaido University, Kita-10 Nishi-7 Kita-ku, Sapporo 060-0810, Japan

***) 連絡先: 060-0810 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学大学院文学研究科

| | | | |
|-------|-----|--------|---------------|
| 第1回開催 | 6月 | 24日(水) | 9:00 - 10:30 |
| 第2回開催 | 8月 | 4日(火) | 8:45 - 10:15 |
| 第3回開催 | 9月 | 28日(月) | 14:30 - 16:00 |
| 第4回開催 | 11月 | 19日(木) | 8:45 - 10:15 |
| 第5回開催 | 1月 | 26日(火) | 8:30 - 10:30 |
| 第6回開催 | 2月 | 24日(水) | 14:00 - 16:00 |

| 氏名 | | | 所属 |
|-----|----|-----|--------------|
| 櫻井 | 義秀 | 教授 | 社会システム科学講座 |
| 中村 | 三春 | 教授 | 映像・表現文化論講座 |
| 中戸川 | 孝治 | 教授 | 哲学講座 |
| 蔵田 | 伸雄 | 教授 | 倫理学講座 |
| 村松 | 正隆 | 准教授 | 倫理学講座 |
| 眞嶋 | 俊造 | 准教授 | 応用倫理研究教育センター |

授業やプログラムの詳細は、「文学研究科向け英語による授業に関するFD報告書」(北海道大学学術国際部国際企画課刊行, 平成22年3月)を参照していただきたい。

2. 参加教員の感想

参加者6名の感想を抜粋して授業の状況・評価を示し、最後に著者の私見を加える。

2.1 役に立った事項

- ・自分で発表しているビデオをみたことは、非常によい体験であった。無意識に行っている動作・目線など、後で客観的に、対象化して、観察できる点がとても有益でした。
- ・『大学教員のための教室英語表現300』(中井俊樹編, アルク出版, 2008年)の2冊のテキストブックの内容が、非常に役に立ちました。
- ・教え方の新しいアイデアを自分で試すことができ、他の教員がしていることを見ることができた

点。英語による授業で生じる問題を実際に経験する機会があった点。

2.2 改善・変更を希望される事項

- ・先生方の英語力のレベルがある程度揃っている方がよいかもしれません。参加者の数が多ければ、「レベル別クラス編成」を考えてもよいと思います。
- ・異論もあろうが、理想とされるスタイルが画一化されているように思う。学生に興味を持たせることと、学生の積極的な参加を促すことは、少し違うことだと私は考えているが、ここではそれが同一視されていたように思う。もっとも解決策はないが。
- ・「英語による授業FD」という括り方に多くの授業方法や観点が盛り込まれすぎており、元々英語の運用力や授業経験がない人にとっては必ずしもスキルアップにつながらない問題がある。私は英語教育、FDの素人ではあるが、次のような要素が授業では本来分けられるべきものであると考える。

- ① 授業の方法：少人数の演習と講義形式
 - ② 留学生の構成：留学生のみか、日本人学生が混じるか。英語を母国語とする留学生が極めて少数のクラスの場合等。
 - ③ 授業の内容：1) 全学教育，専門課程，大学院，レベルに応じた授業のあり方がある。一番難しいのは，多様な問題関心，背景的知識も異なる学生対象の全学教育だろう。
- ・ (部局の同僚よりも) 学生ボランティアを迎えてデモレクソンを行うと，学生の視点をより理解できるので良かったと思う。「建設的なフィードバック」よりも匿名のフィードバックを行う方が，デモレクソンに関してより「率直な」コメントや批評が出てくると思う。

2.3 その他の意見等

- ・ 英語によるFDは実践的であり，即戦力養成のコースとして極めて有益でありことに疑問の余地はありません。今後も継続されることを切に希望します。
- ・ 真剣に取り組むと，やはり時間を相当かけなければならないように思います。今後さらに全学的に英語FDを行うなら，夏休みに集中的に行うかなどの工夫が必要です。
- ・ このプログラムを色々なところにPRしておきたい，という主催者側の意向でオブザーバー，見学者が相次いだが，「こちとらそのための材料じゃない」という不満もある。
- ・ 多くの教員は，日常的に研究・教育・大学の業務に忙しいのでFD/研修に時間を割けないと思う。しかし，留学生相手に教えて欲しいという要請があるような分野の教員（特に日本語学・日本史・日本文化・日本社会論等）に対しては，通訳を行う学術研究員PDを配する等して，チーム・ティーチングを行うのが実際的で効果がある方法になるのではないかと。

2.4 著者の私見

今回の経験は授業FDに6回継続的に参加したこと，英語による授業という二重の意味で印象深いものだった。話し出すと止まらない性向を持つ我々だ

が，英語使用が幸いし，骨子のみを短く話さざるを得なかった。それでも，佐羽内氏は議論好きの文学部教員6名の扱いに苦勞されたと思う。それぞれに持ち味を出した講義（講演）を行っていると思認している教員（30代，40代，50代が2名ずつの参加者）が，授業方法のレッスン（言語・論理の明晰性，論点の提示，パワポの使い方，学生からの意見の引き出し方）を一から習い，教員としての技量向上を促されたこと自体，大いに意味がある。

つまり，学習効果の高い授業方法の実践があつてこそ，英語を使用しても効果が期待できるということである。今回は英語使用ということがあつて，謙虚にこの基本を学ぶ態度ができていた。たぶん，日本語環境では5分間のデモレクソン，マイクロ・ティーチング指導は受け付けなかったと思われる。その意味でこのFD企画は意図せざる成果を得た。

ここで，FD的な成果報告は終わりにし，英語授業のFDを国際化戦略と位置づける本学国際企画課（国際本部）のビジョンが，各学部・大学院における国際化の現状を正確に認識し，課題解決を支援するものとなっているのかについて，いささか批判的な論点も交えて意見を述べたい。

3. 国際化加速の状況と課題

3.1 文学部・研究科の現状

2009年度の文学部・文学研究科における留学生の割合は，留年生を除き，学部（約8%），大学院（約17%）である。この数値は，本部が企図する国際化加速化の目標数値（2020年に学士課程の約10%，修士20%，博士30%，全学で18.6%）に近い数値となっている。修士・博士課程の受験者数を見る限り，文学研究科では，数年の間に大学院では目標数値を達成することが予想される。ちなみに2010年度の秋に次年度修士課程受験を見込む学部研究生には，50名を超す中国からの留学生が予定されている。修士課程の定員のおよそ半分である。このような留学生の割合が増加している大学院教育の現状をリアルに認識することこそが，実質的な意味で国際化加速の方策を考えるために重要である。

| | H20 | H21 |
|---|-----|-----|
| <受入> | | |
| 国費 | 4 | 7 |
| HUSTEP | 13 | 18 |
| 特別聴講学生 (HUSTEP 以外) | 3 | 8 |
| 特別研究生 | 1 | |
| 私費 | 18 | 23 |
| <派遣> | | |
| 交換留学 | 10 | 8 |
| < H21 年度在籍者数 (留学生) 22.1.5 現在 > | | |
| | 大学院 | 学部 |
| 国費 | 17 | 1 |
| 国費 (研究生) | 1 | 4 |
| HUSTEP | — | 18 |
| 特別聴講学生 (HUSTEP 以外) | — | 8 |
| 私費 | 48 | 4 |
| 私費 (研究生) | 4 | 21 |
| 合計 | 70 | 56 |

以下は、問題点を箇条書きにしたものである。

- ① 留学生の中国への偏り、留学生の質の多様化（学力、学習意欲、生活態度、アルバイト状況、授業料納付状況等）が見られる。
- ② 留学生指導に教員はかなりの時間を割かざるを得ない。学部生の2, 3倍だろう。つまり、受け入れの諸連絡・事務的手続き・奨学金等申請の所見記入等（年に数度）が煩雑であるのは言うに及ばず、言語を媒介する学問が多い文学部・研究科では言語指導が要る。日本語検定1級取得者を受け入れの前提としている著者でも実態は変わらない。
- ③ 修士論文・博士論文の日本語の校閲に係る支援体制作りなしに大学院生の指導はできない。とりわけ、雑誌論文では相当な添削指導なしにパ

スしない。留学生が研究室の過半を超すと留学生が日本人院生に日本語チェックを頼みづらくなり、教員に負担がかかる。

- ④ 留学生が在籍する専門と稀な専門との差がつき、専門・教員間で教育負担が偏ってくる。留学生の志向性に合わない分野の教員としては、留学生を好きで受け入れないわけではなく、いかんともしがたい。他方、常時一学年で数名の留学生を抱える教員もいる。
- ⑤ 留学生と指導教員の関係で異文化・志向性による葛藤を生じる割合が高くなる。学生相談室への対応では済まないケースもあり、大学院生・教員とも消耗する。

以上の問題を研究科としてどう解決していくのか、試行錯誤の段階にあり、留学生が大学院におい

て20%を超えてくることの意味は、上記の問題に教職員が対応を迫られるということである。日本人学生・大学院生への指導時間の減少と、研究時間の減少に特定分野の各受入教員がどれだけ堪えられるのか。これが問題である。

3.2 課題への対応

文学研究科において留学生の増加見込みは、今のところ中国からの留学生に限られる。英語で授業を開講することもある程度の意味はあるが、実質的な効果を求めるのであれば、中国の留学生に対して日本語教育・日本語の論文執筆に係るアカデミック・ライティングの授業・支援等を充実することが、学位（修士・博士）授与率の向上と大学院生達に日本語能力という付加価値を獲得させることにつながる。

大学としての取り組みは、各学部・研究科の留学生受入状況の特性に合わせた計画と、大学全体の国際化加速をめざすやり方を明確に分けてなされるべきである。自然科学系の学部・研究科には国際水準の学問を学ぶ留学生が来る一方で、人文社会学関連の学部・研究科には、日本文化や日本社会の仕組みを学びつつ特定分野の学問も行いたいという留学生が来る。この特徴をおさえた教育体制を構築しないと、英語だけでおす国際化路線は留学生の本来的なニーズに対応できないように思われる。

文学研究科に関して述べれば、日本語を媒介語にすることが容易な東アジアの留学生（大半が大学の学部で日本語・日本学専攻）への対応の他に、英語を媒介語として日本（日本語、日本文化、日本社会）を学びたい留学生にも対応の準備はしておいてよい。

しかし、日本の人文学・社会科学に関するリベラル・アーツの部分を英語授業で提供する際に、留学生対応の現状で示した教員負担をさらに増す形でのカリキュラムの充実には限界があることに留意しておきたい。英語の授業に意欲的な教員もいるし、海外で学位取得した教員もいるが、日本研究を専門とする教員は概して英語授業が苦手である。ここには、英語の通訳を主な業務とする特別研究員雇用などで

チーム・ティーチングをするのが最も効率的である。

今後、国際本部に期待したいことは、英語で授業を志す教員に対してFD研修や海外派遣を行うことその他に、全学的な留学生対応のシステム作りである。

- ① 海外からの留学生による問い合わせは、全学で窓口を統一し、専門職員がスクリーニングを行った上で関連部局・教員に連絡した方がよい。大学院に関して、留学生と教員が直接的にやりとりする現行の方式は非効率すぎる。北海道大学の大学院で〇〇の専門で勉強したいという留学生が、〇〇講座の〇〇先生の指導の下学習したいと申し出て、先生の承諾を得なければ留学できないという部局単位の受け入れ制度は限界に来ていると考える。
- ② HUSTEPの留学生や大学間交流協定による交換留学生に加えて、部局間の交換留学生や私費外国人の研究生・大学院生にも日本語学習の機会等を確保していただきたい。
- ③ 中国からの留学生対応は、北京オフィスが検定料・受験料納付等の現地手続きを加えて留学生への利便性を図ってもらいたい。筆者などは研究生の検定料を毎回代わって納付し、留学生の負担軽減と手続きの迅速化を図っているが、いささか危ういやり方である。

最後になるが、個人的な所感を述べて本稿をまとめたい。

国際化加速の方策は、首都圏にある私立大学や東京大学・京都大学・大阪大学等とは違うやり方であれば後塵を拝するのみとなる。第一に、東アジア・東南アジアの留学生は元来が欧米志向であり、日本を選択してもブランド志向が強い。第二に、私費留学生等の場合はアルバイトの有無や時給が大きな要素になる。北海道大学には、全学生の留学生比率〇〇%といった数値を追求するよりも、大学間・部局間の学術・学生交流協定を締結した大学間で、慎重にかつ念入りの教育体制を組みながら、少数の留学生相手であっても丁寧な教育を行うことで大学の評価を上げるやり方を模索する道もあるのではないか。